

1 亡霊

「戸をたたくのは誰」 「それはわたしよ 昔は美しかった
でも 元通りになれるとは夢思えない
暗い山査子の根元から戻って来て
こうして戸をたたいているのです」

「しゃべっているのは誰」 「それはわたしよ 昔はきれいな声で 5
空飛ぶ小鳥のさえずりのようと言われ
妖精エコーが川辺でこっそり^{ききみ}聞耳立てるほどの声
あのわたしが今 優しく話しかけているのです」

「真っ暗闇だ」 「そうよ そして寒いわ」
「^{ひとけ}人気の無い家だ」 「ああ でも もう戻れないわ」 10
「見ていたもの触れていたものを わが目と唇が空しく求める」
「それらは もはや あなたのものではないのです」

沈黙 ポーチにまだ^{かす}幽かに
星々の残炎が射している
暗闇の中を 希望に^う倦んだ手が 15
鍵を ^{かんぬき}門を 錠前を まさぐる

顔が覗き込む
薄暗い夜が ^{くう}空なる混沌の中に輝く
あるものは ただ ^{ぼうぼく}茫漠たる悲しみ
甘美なる欺瞞の跡形も無し 20